

「鎖国」時代の日朝貿易——銀の路・絹の路——

田代和生

今日は、私がこれまでに研究した総まとめをお話し致します。と申しますのは、私、この研究に入りましてから四年ほどたちます。実は、学部学生時代からこのテーマに関心を持っておりまして、この間、ずっと同じ研究をしております。何でそんなに同じ研究をいつまでも続けていられるのか、なぜそれほど長い間興味を持ち続けられるのか、といった疑問をもたれる方が多いかと思えます。そこで、これは最初に歴史研究に入ったあたりからお話ししなければならぬと思います。そして、「人參代往古銀との出会い」、あるいは「ミステリーと歴史研究」という内容から入らせていただきます。

まず、私がなぜ歴史に興味を持ったのか、そのきっかけはよく分からないのですが、小学生のときに、気がつく和学校の図書館に行って昔話ばかり読みあさっていました。何か古いことが小学生なのに不思議に好きで、それも日本もの、東洋や西洋のもの、全然関係なく、とにかく昔話ばかりを借りて読んでいました。これがそのうちにミステリー好きが加わるのです。このミステリー好きというところが、どうも歴史好きと関係があるようです。つまり謎を解くことの楽しみです。初めは、もちろん答えが分からない。しかし最後には解ける。これが楽しいのです。高校生ぐらいいからミステリー好きが加わり、大学生になって昔話好き

きが歴史好きになったようです。

大学に入りました頃、最初は古代史を専攻しようと考えておりました。そのころ邪馬台国論争というのがありまして、女王卑弥呼の国がどこにあるのか。最近になって新しく古墳が発掘されて、邪馬台国が奈良県あたりではないか、いわゆる大和説が有利になったような感がありますが、この論争は昔からさかんで、ちょうど私の学生時代に何回目かのブームがあったようです。このことについて書かれた本が何十冊も出たり、謎の国がどこにあるのか。そこにミステリーと歴史のロマンを感じまして、それで古代史をやってみたいと考えたことがありました。

しかし、「謎の国」というのは答えが分からないから謎なのです。それも、今だに分からない。すると犯人を探していて、犯人がいつまでたってもずっと出てこないのと同じで、いらいらしてくるのですね。ミステリー好きとしては、やっぱり最後は犯人が分かかって、事件を解決して欲しいのです。そこで何で分からないのかということを考えてみますと、原因は資料に限界があるようなのです。古代史の場合、ほとんどの文字史料が活字になっていますが、一次資料はかなり限られた状態にあります。とりわけ邪馬台

国を考えると時の手がかりというのが、中国の書物、つまり三国志の中の魏志倭人伝です。このたった一つの文献から、大勢の人が様々な説をとなえているのです。中国からみれば、邪馬台国はしよせん外国ですので、それがどこにあるのか正確に知る必要はないのです。ですから記述がかなりいいかげんです。そこで解釈論ばかりが堂々巡りを繰り返すものの、結局、結論は出ない。そのような本を何冊も読んでいると、いつの間にか飽きてくるのです。

ちょうどこのことを考えていた大学三年生の春ごろ、ミミズののたくったような文字、つまり古文書と出会いました。古文書演習という授業をとりましたら、担当されたのが古代史の先生でした。古代史の先生だから、古代の古文書を使うのかなと思いましたら、その先生はなんと江戸時代の文書を使われたのです。そのとき先生は、江戸時代は活字になっているものが少ないからテキストがたくさんあるが、古代史のものはほとんどが活字になってしまっている。ので授業では使えないとおっしゃったのです。後で分かったことですが、近世史料の八割から九割ぐらいがまだ活字化されておらず、日本の各地にそのまま残されている、というのです。では、それを読めるようになれば、何か歴

史の新しいことを自分なりに考えることができるのではないかなと思いました。

そのころ、近世史をやるうと思っただ人たちが必ず突き当たる山が、マルクス史学でした。特に太閤検地論争が真つ盛りで、それと学生運動のはしりが重なりまして、日本の農民の地位、例えば農奴なるものが日本にいるのかいないのかなどという問題も含めまして、いろいろと議論が交わされていました。これがそのころの流行だったのですが、皆の関心を寄せる土地の問題というのは、私にとってやっぱりおもしろくありませんでした。むしろ関心をいだいたのが、その当時、ブルジョア階級の論議だと非難された、金とか銀とか、つまりお金の歴史でして、なぜかこちらの方に歴史のロマンを感じとってしまったのです。大学の三年生の夏ぐらいから、漠然と貨幣史をやりたいと考えておりました。

しかしこの分野に関しては難しい本ばかりで、特に難しかったのが田谷博吉先生の書かれた『近世銀座の研究』（一九六三年、吉川弘文館）という本でした。田谷先生は京都大学の御出身で、この大阪経済大学の日本経済史研究所をおつくりになられた本庄栄治郎先生の御一門であります。

そのころ大阪府立大学で教鞭をとっておられました。貨幣史の基本的な書物ですので、ともかくこれを読んで理解しようとしたのですが、これがえらく難しいのです。日本史の知識はもちろんのこと、経済史の専門の知識も必要です。しかも江戸時代のお金というのは、大判、小判だけでなく、丁銀・豆板銀、銭、藩札などが入り交じり、その使用も各地同一でなく、時代によってばらばらの品質のものが流通しているのです。つまり日本国中に円・ドル・マルク・ウォンとか、その他の通貨が混在している社会、これが江戸時代の貨幣の流通実態です。

何回読んでも理解できずにあきらめかけていたころ、たった一章だけ例外的に分かりやすい章がありました。それは、人參代往古銀について書かれた章です。実は、これは京都の銀座でつくられた銀貨なのですが、国内では全く通用しない不思議な銀貨です。加えて、この変な名称です。人參とは、朝鮮の薬用人參のこと、つまり薬のことです。ちょうどそのころ、徳川幕府は貨幣を悪鑄しておりまして、品質の悪い銀貨を朝鮮側が受け取ってくれず、しかたなく人參を買うために特別に品位の良い貿易銀（人參代往古銀）を渡したのです。このように常識から外れた、異質の銀貨

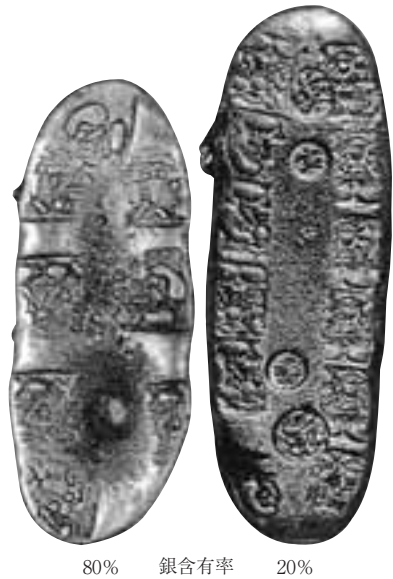


図1 人參代往古銀(左)と宝永四ツ宝銀
(日本銀行貨幣博物館所蔵)

のことが本に書かれていたのです。歴史のミステリーが、そこにありました。

図1の左が人參代往古銀、右がそのころ国内で使われていた宝永四ツ宝銀です。銀の含有率は人參代往古銀が八〇%、四ツ宝銀はわずか二〇%ですから朝鮮側が受け取ってくれないのは当然のことです。仕方なく人參輸入のために貿易銀を渡していたのです。この人參代往古銀ですが、そのころは写真さえもなく、田谷先生の本でしか知ることができませんでした。もっと知りたいと思っても、ほかの文献には出てきません。これは直接御本人にお聞きするしか

いと考えまして、東京方面に資料調査においでになる機会をとらえて、先生の助手を務めさせていただくことになりました。

先生が待合い場所に指定したのが、日本銀行です。大学三年生の学生にとって、日銀がどこにあるかもわかりませんでしたが、とにかくたどりついてみると、案内されたのが標本貨幣室という部屋でした。先生はそこにカメラを持ち込まれて、収蔵されている古文書を一枚一枚撮影されていきます。今でこそカメラを使って資料調査をすることは珍しくありませんが、そのころは普通、古文書は手で筆写するものだと考えられていた時代です。しかし所蔵先が居住地から遠く離れていて、何回も見せていただけるとは限らない場合、フィルムにおさめておけば短時間で大量の資料を自分のところに持ち帰ることができます。これは新しい調査の方法だと思い、助手を務めながらいろいろな技術を学ばせていただきました。

ただし、そのころの助手はバイト代なしです。ひたすら御奉公。床に靴を脱いではいつくばり、紙の上に広げた古文書を一枚一枚押さえます。先生は三脚の上から、「田代さん、ブレるから息しないでください」と言われ、ぐっと

息をつめるとシャッターが押されます。それを何時間も繰り返すだけです。肝心な研究のことを質問すれば、本に書いてあること以外は分からないという、つれない御回答です。もともとそうかもしれませんね。

この調査のとき、一つだけ神様が御褒美を与えて下さいました。著名な田谷先生がいらしたということで、標本貨幣室の方がそこで保管されている一枚の銀貨を持ってこれ、「これは人参代往古銀に間違いありませんか」と確認されたのです。これこそ日本国内にたった一枚だけ、完全な形で残っていた人参代往古銀との運命的な出会いでした。そしてまた先生が調査された日本銀行ですが、そのときからおつき合いが始まりました。今日まで四〇年間、文学部に所属していながらも、日本銀行でのいろいろな役を務めさせていただいています。それはこの一枚の銀貨との出会いのご縁に始まります。

さて、卒論のタイトルも決まりました。「銀と人参」です。しかし銀座から追いかけるのは田谷先生がすでになさっているの、これ以上は無理かなと思ひまして、そこで日朝貿易を仕切っていた対馬藩宗家の史料を使って書くと考えました。ただしそのころ宗家文書を使った研究は

全くありませんでしたし、第一この史料がどこにどれだけあるかについてもまったく分かりませんでした。

日本・朝鮮関係の研究は、そのころ外交史が主役でした。中村榮孝先生の書かれた『日鮮関係史の研究』（上（一九六五年）、中・下（一九六九年）いずれも吉川弘文館）という有名な本が刊行されておりましたが、外交中心で貿易のことはほとんど出てきません。この傾向は、現在も同じで、例えば朝鮮から来日した外交使節である朝鮮通信使のことばかりに研究の主眼が置かれている感があります。私は、貿易など経済史関係に関心をもっておりまして、それにはとりあえず東京にある宗家の記録類を見なければならな

いと決心しました。

「対馬宗家文書保管所の変遷」という図2をご覧ください。左のほうのA・B・Cというのは、もともと宗家文書がどこで作成され、保管されていたかを場所別に示したものです。まずA対馬藩庁というのは、国元です。ここで最も大量に文書が作られておりました。B倭館は、朝鮮釜山に置かれていた日本人の応接所です。後ほど詳しく触れますが、対馬藩はこの倭館で外交や貿易を行っておりまして、それに関連した記録類が大量に作られております。

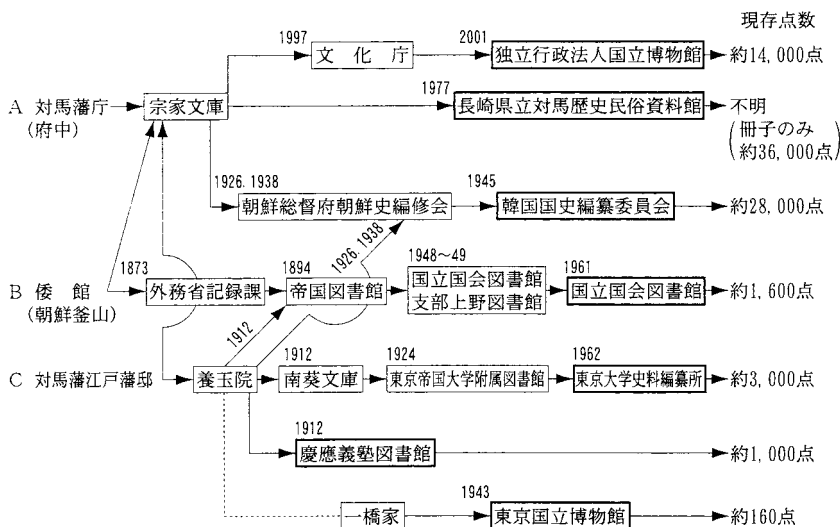


図2 対馬宗家文書保管所の変遷

筆者作成

C江戸の対馬藩邸では、幕府との関係記録が作られました。主としてこの三箇所で作成されてきました宗家文書ですが、江戸時代が終わり、近代から現代に至るまでの保管場所をみてみますと、かなり分散化していることが分かります。これは、この文書類が余りにも膨大であったために、一カ所で保管・管理することが不可能であったことを物語っています。

現在の保管場所を、個別に見ていきましょう。一番上の独立行政法人国立博物館ですが、これは福岡の九州国立博物館で、大体一万四〇〇〇点ほどです。次の長崎県立対馬歴史民俗資料館は、対馬府中で作成された大量の宗家文書で、最近まで点数は不明でしたが、冊子と合わせまして約八万点ぐらいであることが分かってきました。三番目の韓国の国史編纂委員会は、戦前に朝鮮総督府が買い上げたもので、当初は六万点ほどでしたが、そのうち四万点弱が失われて現在は二万八〇〇〇点になっています。四番目以下が、東京に保管されているものです。国立国会図書館に一六〇〇点、東京大学史料編纂所に三〇〇〇点、そして私が勤めております慶應義塾大学に約一〇〇〇点ほどあります。最後の東京国立博物館は最近発見された分ですが、明治期

になって宗家から写本ばかり一六〇点ほどが一橋家に入り、その一橋家から東京国立博物館に入ったようです。私が卒業論文で参考にできましたのは、これらのうち国立国会図書館・東京大学史料編纂所・慶應義塾大学の三カ所です。

しかしまだ学部四年生だったこと、それと未整理であるということで見せていただけない所もありまして、仕方なくその先生に借りていただいて別室で拝見させていただきました。宗家文書は比較的きれいな字体で書かれておりましたので読みやすかったのは良かったのですが、ともかく量が多い。そのとき、三年生で古文書の勉強をやっております。それによかったと思いました。

この宗家文書を見ているうちに、同じときなのになぜか数字が合わないことに気がつきました。特に幕府に対して報告している数字と、対馬藩内の数字がちぐはぐなのです。これは恐らく二重帳簿をつけていたためでしょう。このあたりのことはまだ解決できませんでしたが、とりあえず卒論だけは何とか仕上げまして、田谷先生にも褒めていただいたのですが、後でよくよく考えましたら、結局は先生の説を補強しただけではないかという反省だらけの論文でした。そこでこの問題は、日本の銀の動きを東アジア経済史

の視角から探らなければダメだと考えまして、大学院へ入ってすぐに対馬へ行く決心をいたしました。

一九六八年の夏、生まれて初めて対馬へ渡りました。そのころは大阪までしか新幹線がなかったものですから、夜行に乗りかえて博多まで行き、さらに船で六時間かけて対馬へ渡りました。船は三時間ほどで壱岐へ着くのですが、そこでほとんどの観光客はおりてしまい、あとは地元の漁師さんとかお年寄りだけで、学生風の者は一人も乗ってないような寂しい状態が三時間も続きます。玄界灘は、波がものすごいですね。フラフラになって対馬の厳原港いずはらに着きました。そこで目にしたのは、ものすごい史料の山です。すっかり興奮して、田谷先生へ「宝島を発見しました！」という内容の手紙を書いた記憶があります。

対馬では、田谷先生が教えてくださったカメラの技術が役に立ちました。しかし余りにも史料が多いために、持っていたフィルムでは到底足りません。そこで翌年から、持ち込んだフィルムの数に合わせて、絶対に写したいものだけの小山を作り、そこから写していくという戦術をとりました。もちろん目録などもないわけですから、目の前にある古文書をいきなり開いて速読し、一瞬のうちにそこに

何を書いてあるのかをみて、写すかどうか判断しなければなりません。ちなみに宗家文書というのは、ものすごい情報量です。表紙だけでなく、底の部分にも文字が書けるほどぶ厚いものが大量にあります。そのころ宗家文書が収蔵されていた対馬厳原の宗家文庫には、古文書が天井までぎっしりと、棚に入るだけ突っ込んで納められていた状態でした。調査では、とりあえずその棚の一行を出してみても、この史料は自分の研究に利用できるのか、どのような情報が得られるかを見極めてから撮影にはいります。まるで古文書読みの猛特訓をしているようで、宗家文書のお陰でうにか史料を読みこなせるようになったのだと感謝しています。とにかく史料の山を前にして、もうおもしろくておもしろくて研究がやめられない状態でした。

それから約八年間かけまして、内容を学位論文にまとめました。そこでは貿易の構造、形態、あるいは何がどれだけ幾らで取引されていたのか基本的な数値、またこの貿易を誰が担当したのか、そういった具体的なことを明らかにしました。そこで分かったことは、対馬藩宗家は幕府の目を盗んで、ものすごい量の銀貨を外国に輸出していたのです。これは一七世紀のころから一八世紀にかけてですが、

最初のころは一年間に約二〇〇貫目ぐらいです。一貫目は三・七五キログラムですので、二〇〇貫目は七・五トンになります。これだけの重さの銀貨が、毎年のように朝鮮へ出ていたことになります。

実は一七世紀のころから後期にかけて、長崎貿易では銀貨をほとんど輸出しません。年間で三〇〇貫目ぐらいです。やがて一〇〇貫目ぐらいに落ち、さらに輸出は落ちるいつぱうです。これは幕府の政策の結果です。かつて鎖国時代と言われていた日本の国際関係は、長崎が唯一の貿易港で、貿易量は最大であると考えられていました。それが対朝鮮貿易で、長崎を凌駕する大量の銀貨が流れていたのです。このことは、歴大な史料の山の中から発見できたことで、これまでの定説を覆すことができました。これこそ研究の醍醐味です。

しかしここで満足していたら、歴史ロマンの追求は終わってしまいます。そこで次なる課題として、なぜ長崎を上回ることができたのか。それも対馬からこれほど大量の銀貨をどうやって朝鮮へ持ち出すことができたのか、といった素朴な疑問の答え探しにいどむことになりました。

理由のその一として考えたことは、結局、幕府の特別配

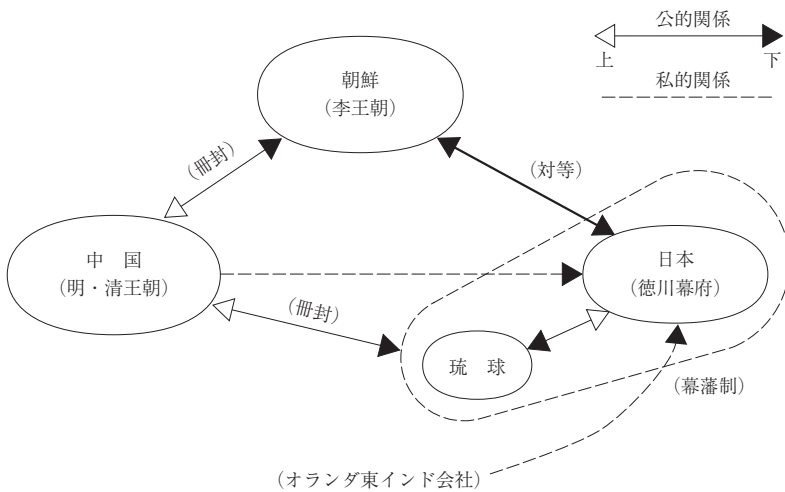


図3 「鎖国」の構図

筆者作成

慮があったからにはほかならないということです。その答えは、鎖国時代の国際関係、つまり「鎖国の構図」という図を見ていきますと、自然に解けてきます。一六三〇年代、徳川家光が鎖国令を発令し、日本の国際関係は四つの国に限定されることになりました。長崎では中国とオランダ、そして対馬藩宗家を通じて朝鮮、そして薩摩藩を通じて琉球国、この四カ国とだけ国際関係を継続させました。北の方の蝦夷、こちらは通常の国際関係とは言い切れませんので、この際検討から外しておきます。とりあえず外国の国家レベルでの関係という形では、中国、オランダ、そして朝鮮、琉球の四カ国とだけ日本は国際関係を持つておりました。この図3から読み取っていただきたいことは、太線、それと点線、さらにそれらの線がどちらの方の矢印に向かって上下関係を持つていたかということです。

例えば朝鮮は日本の徳川幕府と対等な外交関係ですので、矢印が太線でそれぞれの方向へ向かっています。また朝鮮国は中国との間に国際関係がありますが、これは上下のある冊封関係です。中国に対して朝貢使節団を出し、このことを認める使節団が中国からやってきます。これは両国が、上下の形で結ばれていることになります。つまりその当時

表 1 朝鮮通信使と琉球使節の比較

	朝鮮	琉球
名 称	通信使	慶賀使・謝恩使
回 数	12回	18回
人 数	400～500人	70～100人(最多170人)
外交書簡	大君↔国王	老中(上)↔中山王(下)
応 接 係	高家(名家26家)	奏者番
意 識	聘礼	来貢

筆者作成

おります。中国の明あるいは清王朝から日本へ貿易商人が長崎へやってまいりますが、日本から中国へ使節団が行くということはありません。一方的に貿易商人が入ってきて商売をして帰るのです。同じようにオランダ東インド会社の社員は長崎の出島に入りますが、日本からオランダ国に対して、外交使節は出ません。一方的に向こうから日本の国、長崎へ向かって貿易商人が入ってくるという形をとりました。だから、商売の相手国と日本では考えていたので

の東アジア国際社会では、上下ある外交と対等な外交が混在していたことがわかります。

ただし、日本の長崎口における中国とオランダとの二つの国とは、商売だけでありまして、外交が成立しておりません。ですから、この二つの国のことをよく「通商の国」と言って

す。

これに対して、お隣の朝鮮、それから琉球とは、貿易だけでなく、正式な外交があつて、それで貿易が成り立っております。この二つの国のことを「通信の国」と呼びます。朝鮮から来日する通信使は、朝鮮国王からの対等な書式の国書を持って来日します。琉球国は中山王の国書を持った使節が、薩摩藩島津氏に守られて江戸へやってまいります。このように琉球国と朝鮮国とは外交が成立していますが、日本側の応接レベルが違います。表1をごらんください。朝鮮、琉球は、ともに外交が成立していながら、それぞれの使節には格があります。朝鮮の使節は「通信使」、琉球の使節は「慶賀使」「謝恩使」などと言います。江戸時代に来日した回数ですが、琉球国からは一八回、朝鮮国からは一二回と、若干朝鮮の方が少ないのです。しかし、人数、外交書簡のレベル、応接係、そして日本の意識、この辺から大きく差が出てまいります。

琉球使節の人数は、一番多いときは新井白石が活躍したときですが、この時が一七〇人。通常は大体七〇人から一〇〇人が、琉球の使節団の規模です。ところが、朝鮮通信使の方は、四〇〇人から五〇〇人という大使節団です。外

交書簡のレベルですが、朝鮮通信使は日本の徳川將軍を外交的に大君と呼びます。この大君と朝鮮国王との間は、どちらが上でも下でもない対等な書式で外交書簡を交換します。琉球使節の方ですが、こちらは中山王が將軍に対してあて名を書くことは許されずにすべて老中あてに書きますが、その書式は中山王が下で老中が上、つまり上下関係の書式になっています。

江戸城での応接も、はっきりと区別されております。朝鮮通信使の応接係は高家です。高家とは、例えば吉良上野介などもその家柄ですが、江戸幕府は由緒ある武家を二六家ほど高家に指定し、天皇の勅使や、あるいは朝鮮通信使が来日したときとか、江戸城における応接役にあてています。高家が出てきて応接をするということは、江戸幕府にとって、それが賓客であるということの意味しているのです。

琉球使節の方は、奏者番が応接係をいたします。奏者番とは、大名が参勤交代で江戸城に登城して將軍にお目通りするとき、老中と大名家の間を仲介する役人です。江戸幕府にとって、將軍の下に位置する大名を応接するのが奏者番です。琉球使節の応接役に奏者番があてられているとい

うことは、明らかに下の者を応接するという意識があったからです。このように、応接役の差がそのまま外交上のランクの差になっていったといえます。

そして、何よりも日本側の意識ですが、琉球使節の方は「来貢」といつて、貢ぎ物を持ってやってくる朝貢使節と日本側は見ております。朝鮮通信使の方は「聘礼」といいます。聘礼とはとても丁寧な言葉で、来ていただくという意味です。つまりそれほど手厚くもてなすという意味が込められているのです。琉球使節、通信使との間でこれだけの格差があるということは、たとえ同じ外交関係にある国であっても、江戸幕府は外交に対するランク付けをもって接していたことになります。

来日した朝鮮通信使は、最上級のもてなしで扱われます。ごちそうの出し方はもちろん、道中で橋のかかつていない河川には船橋を特設する、これは天皇家からの使いである勅使と全く同じ扱いです。江戸城での応接のレベルも含めて、すべて勅使並みです。このように余りにも格が上過ぎるので、新井白石の時代にもっと応接の格を落とせということが命じられ、それですごい論争になったということは有名なことです。

朝鮮通信使を、日本にとって最上位の国に位置づけるということ。一体なぜこのような形にしたのかといいますと、これはおそらく江戸幕府の一つのイデオロギーをそこに示したのではないかと考えられます。江戸幕府は、自分の国より上位の国と外交したくないという意識があります。上位の国とは、中国です。中国の皇帝の下に位置するのが「国王」です。そこで幕府は、あえて中国とは国交を持たずに、来日したい貿易商人だけに荷物を持ってこさせて長崎で商売をさせる。そういう形にとどめておくことこそが、江戸幕府のひとつのイデオロギーだと理解できます。

江戸時代には、今という外務省のような役所はありませんでした。それでいながら、外交上最も丁寧に扱わなければいけない朝鮮との関係については、すべてを対馬藩宗氏に一任していました。幕府は宗家が望めば一〇万石という破格の格式を与え、日朝外交をあずかる大名として決して見劣りしない位置において、朝鮮通信使の応接役を務めさせていたのです。ただし外交には、ものすごいお金がかかります。そこで対馬藩には貿易の独占権を与え、一種の経済的な保証を与えながら、日本にとっての最上位の国を応接させていたのです。

さきほど申し上げた理由のその一。つまり日朝貿易はなぜ長崎を上回ることができたのかは、幕府の特別待遇があったためと申しましたが、二重帳簿も含めて幕府は薄々だまされていることはある程度承知していたのではないかと考えられます。かりに日朝貿易がうまくいかなければ、外交のための莫大な費用を対馬藩へ与えなければなりません。だから、ある意味では対馬藩に貿易を自由にやらせて、必要な資金をかせいでくれたほうが幕府にとっては好都合であったはずですが。さらに理由の二つめですが、貿易をやる場所が幕府の目の届かないところなので、チェックができないという点があります。逆に長崎貿易は、幕府の目の届くところですが。ここは直轄地ですので、幕府の奉行や代官を配置して、貿易をどのようにやっているか、一部始終を管理監督できます。しかしながら日朝貿易は幕府の目の届かない外国の地でやるという、中世からの歴史的な伝統を江戸時代に入ってもそのまま踏襲していました。

日朝貿易を行う場所を、倭館といいます。ここは鎖国時代に置かれていた日本人町です。草梁和館絵図(図4)をご覧ください。倭館とは、日本から来る使節団を接待するための、いわゆるゲストハウスでした。最初に倭館ができ

たのは一五世紀の初めて、朝鮮の都ソウルでした。その後、貿易でやってくる人たちにもそうした施設が必要だということ、日本人が入ってくる港にも建てられました。倭館とは、一つの建物ではなく、複数の建物群を指します。倭館の周りの土地も含めた、いわゆる日本人の居住区域と考えると方が良いでしょう。

江戸時代になってからの倭館は、二度ほど移転します。最初に置かれたのが、絶影島（日本名、牧の島）です。ここは、文禄・慶長の役直後に行われた講和交渉のとき、対馬から来た使節が建てたもので、正式なものではないので「仮倭館」と呼ばれていました。近世最初の正式な倭館は、釜山の豆毛浦というところです。一六〇七年、第一回目の朝鮮通信使が来日して、江戸時代の日朝関係が正式に再開されたことから、日本からの使節を迎えるために倭館が建てられたものです。

しかし間もなくして豆毛浦倭館は、狭くて使いにくいというところで、どこかもっと良い場所へ移転させて欲しいという要求が出るようになりました。ところがその交渉に、約三〇年間もかかりました。文禄・慶長の役後、朝鮮では軍事上の機密保持の理由から、国内を日本人に見せたくな

いという方針がとられ、そのため移転交渉が長引いたものです。しかし対馬藩の粘り強い交渉の末、ようやく草梁チヨリヤンという所に新しい倭館を造ることができました。この新倭館が完成したのが一六七八年、明治期になって閉鎖されたのが一八七三年です。草梁倭館は、約二〇〇年間にわたって存続していたことになります。

草梁倭館のことは、史料も絵図も沢山残っています。図をご覧ください。この倭館は、とても広い敷地に建てられています。全体の面積は、大体一〇万坪ほどです。これは外国人用につくられた施設としては、恐らく東アジアでは一番広いと考えられます。たとえば、長崎の唐人屋敷は一万坪ですから、それが一〇個入るほどの大きさです。出島は四〇〇〇坪ですから二五倍の広さになります。このように非常に広大な地域に、大体四〇〇人～五〇〇人ぐらいの日本人が生活していました。ですから鎖国といいますが、実は日本人は海外へ出かけることができたのです。そして、ここで外交や貿易をやるのです。

そのころ、対馬の人口は約三万人ほどでした。このうち倭館で生活していたのが四〇〇～五〇〇人ということは、対馬の人口の大体一・五％に当たります。ここには女性はい

行くことができません。それからご老人や小さな子供も行くことはできません。対馬の成人男子に限りまずと、大体五%になり、二〇人に一人の割合で倭館へ出かけていたことになります。

倭館には一〇万坪の敷地がありますが、この外側にも出ることが出来ます。倭館の外に遊歩地域が四〇万坪ほどあって、散策などに出かける人がおります。ただし夕方までには帰ってくる決まりですが、実際には帰れない人も結構いたようです。このことを考えますと、倭館は日本人を中に閉じこめようとして造られたものではなく、外交や貿易を行う場所、それと生活の安全を約束してくれる場でもあったことになります。倭館の図で、さらに内部を詳しくみていきましょう。まず、中央にあるお城のような館は、館守屋といいます。館守は、倭館全体を統率する責任者で、対馬から二年交替で派遣されてきます。一緒に料理人や医者などを含み、グループでここに入ります。館守屋が最も大きい館ですが、その反対側にも大きな館が並んでいます。こちら一帯は西館と呼ばれ、倭館本来の姿であるゲストハウスとしての役割を果たしている場所です。西館には、使節として任命を受けてきた対馬の人たちが入り、接待を受

けます。この西館と館守屋の間にある山を龍頭山といいます。対馬の人は、東西の館の真ん中にある山ですので、中山と呼びます。現在、ここを龍頭山公園といって、釜山市街を眺めることができるように展望タワーが建っています。

西館の方は、現在も広い敷地のまま、アパート・結婚式場・お寺といった建物が建っています。それぞれの建物の前に、長屋風の建物が六つあります。これを六行廊といって、使節団の中でも下のクラスの人たちが入る長屋です。

西館には対馬からの使節団が入り、ここで外交を行います。来日する通信使はもちろん外交使節ですが、国書の交換などどちらかというとセレモニーが中心になります。しかし倭館で行う外交は、両国の身近に起こった懸案事項を解決するための実務外交です。例えば両国の間にある島の領有権がどうなのかといった、今という竹島問題なども倭館での実務外交になります。使節団ですから、当然のことながら接待を受けます。西館の外側に宴大庁というのがありますが、ここがそうした宴会をする場所です。現在、釜山市の東西にかなり広い道があります。ここを大庁通りテウロといいます。大庁テウロというのは、大広間のある大きな館という意味

です。倭館の西館の外にあった宴大庁からついた通りの名前で、この道路が倭館の北側の位置を知るための良い目印になります。

西館が外交関係の施設であるのに対して、東館はどちらかというと経済的な活動の場になります。まず港があり、貿易品が入ってきますので、蔵がいくつも並んでいます。館守屋の下に開市大庁というのがあり、ここが貿易を行う場所です。初めに申し上げた人参代往古銀も、ここで朝鮮商人の手に渡っていったのです。開市大庁での貿易は月に六回、三と八のつく日です。この日になると朝鮮の商人たちがたくさん品物を持って守門から入り、日本人と相対貿易をします。言葉が分からなければ、通訳がおります。東館には、そうした通詞の屋敷があります。

開市大庁の近くに、裁判屋があります。人を裁く裁判官のことではなく、臨時の外交交渉官をこう呼びます。西館に入る外交官よりも、より緊急性を帯びた事案を交渉するための役人です。この裁判屋の横が、東向寺というお寺です。ここにいる僧侶は、漢文の読み書きができます。かれらは朝鮮国内から入ってくる色々な外交書簡をチェックする役割を兼ねています。寺でありながら、ここは外交文書

を査察する最前線であったことになります。

倭館の周りは、ぐるりと高い堀が取り囲んでおります。この堀は朝鮮側が強制的に作ったのではなく、日本側からお願ひして作ってもらった堀です。実は倭館には、時々トラが侵入してきます。猛獣から身を守るのも重要ですが、堀は「ヒト」の無断侵入を防ぐ意味もあります。倭館の港の倉庫群には、両国の高価な貿易品が詰まっております。そうした金目のものをねらって、よく泥棒が入ってきます。高さ大体二メートルぐらいの倭館の堀は、そうした侵入者に対する防御のためのものでもあります。

倭館の門、つまり出入口は三カ所です。なかでも東館の守門は、最も多くの人たちが出入りする門で、昼間は開いております。西館の門は、宴大庁へ出入りするためのもので、ここは通常、閉まっております。もう一つが、不浄門です。倭館で亡くなった方を日本にもどすため遺骸を外に出す専用門です。しかしそれには少々お金がかかります。資力の無い人は、倭館の外にある日本人墓地へ埋葬されます。

この釜山というところは、もともとは小さな漁師小屋が数軒しかなかったところです。それが、ある時いきなり倭

館が広大な敷地に建てられ、ここに四〇〇〜五〇〇人もの日本人が入居してきたのです。そうなりますと、倭館の周辺には日本人と貿易をするための商人や、また入居者の日常を支えるための様々な職種の人たちが集まり、次々に自分たちの家を作りだします。やがて釜山は、倭館を中心に巨大な商業都市へと様変わりしていきました。こうした歴史は、ちょうど日本の長崎と重なります。長崎は、ポルトガル船を迎え入れるために、小さな漁村が巨大な貿易都市に変貌した町です。歴史だけでなく、共通するのは両方とも坂の町だという点です。つまり海岸部まで山が迫っていて、この地形が船の入りやすい良港としての条件を叶えてくれているのです。神戸・横浜・函館、どれも同じように坂の町で、いずれも外国人の居留地が置かれた港町です。

さてこの倭館の港ですが、建設するときはかなり大変な工事でした。とくに棧橋は埋め立てたものではなく、陸地の部分を削ったようです。工事中は何日間も海水につからなければならなかったのですが、この作業に動員されたのが朝鮮の若い僧侶たちです。記録に、一日四〇〇人ぐらいの僧侶が集められたとあります。これは朝鮮社会における僧侶の社会的な位置とも関係があります。朝鮮では儒教を

重んじる反面、仏教寺院の勢力が低下しており、これに伴って僧侶の社会的な身分が落ちていた時代でした。このために、倭館建設のように国家がからむ土木工事に人夫としてかり出されることが多く、倭館の近辺の寺から大勢の僧侶が工事に加わるようになりました。建築のための費用は、もちろん莫大なものでした。ほとんどは朝鮮側の出費でしたが、東館の館守屋・裁判屋・開市大庁（これを東の三大庁という）を除くほとんどの建物は、対馬藩の出費によるものです。工事は、日本と朝鮮の双方の大工が合同で行います。外見はともかく、住民が生活しやすいように、中の構造は日本家屋そのものになっていました。畳部屋で障子、床の間もしつらえ、冬の暖房には決してオンドルではなく、火鉢に炭火を入れて暖をとります。

ところで、この倭館で貿易をやるということは、その内容が幕府の目に届かないということになります。大量の銀が日本から運ばれてきても、幕府としてはそれをチェックする方法がありません。倭館へ運ばれた銀については、『館守日記』の記事で分かります。館守は、その役を拝命した日から、お役御免になって対馬に戻る日まで、ずっと欠かさずに日記をつけることが義務とされています。この

『館守日記』は、現在、国立国会図書館に全部で八六〇冊ほど残っております。なぜこんなにたくさんさんの記録をつけたかといいますと、結局それは対馬宗家が朝鮮の倭館で外交を担っていたということと関係しています。外交を行うために重要なことは、故事先例です。何か事が起こったとき、それが以前、どのように議論されて解決されてきたのか。

そのことが分かれば、将来同じことが起きたときに交渉事を有利に進めることができます。つまり外交を扱っていたがために、記録を懸命に作り、その保管と管理、活用の重要性を認識していくことになります。記録の充実が国際関係に有利に働くことを知った対馬藩は、この倭館に派遣された役人たちに記録をこまめにつけることを義務としました。やがて膨大な宗家文書が誕生することになるのですが、これが日朝関係の多くの事柄を知るための素晴らしい情報を現代の私たちに提供してくれます。もちろん、幕府が知ることのできなかった貿易の真の姿を、この記録を利用することによって明らかにできます。

図5-1をご覧ください。これは開市大庁で行われた私貿易の輸出入額、それと幕府が設定した制限額を比較したものです。表の実線が輸出額で、点線が輸入額です。下の

方の線が、「幕府制限額」です。幕府は貞享三年（一六八六）、対馬宗家に対して日朝貿易の年間限度枠を一〇八〇貫目と命じました。しかし、対馬藩はこれを全く守らず、実線や点線のように、多いときで約六〇〇〇貫目の貿易をしていたのです。むしろ貿易額が少なくなるのは元禄期で、幕府が制限を一八〇〇貫目に緩めたころです。なぜ制限枠を緩めたのかといいますと、これこそ貨幣改鑄の影響です。元禄八年（一六九五）は、萩原重秀が貨幣改鑄をした年です。その改鑄は金銀の含有量を切り下げる悪鑄で、しかも後の宝永期になってそれがさらに加速していきました。最初に述べた人參代往古銀の鑄造につながる宝永四ツ宝銀は、なんと銀が二〇%、銅が八〇%という劣悪な銀貨幣です。この悪鑄のため、貿易品の購買力が落ち、幕府は日朝貿易の制限枠を一〇八〇貫目から一八〇〇貫目に増額してあげたのです。ところが倭館で行われていた貿易は、表にもありますように、幕府の制限緩和にもかかわらず、逆にどんどんと落ちていきます。そこで対馬藩は、朝鮮人參の輸入量が減少したことを理由に、人參代往古銀という特殊な貿易銀の鑄造を幕府に願っていたのです。しかしこの対馬藩の主張は、日朝貿易の真実の姿を述べたものではありません。

図5-1 私貿易輸出入額と幕府制限額

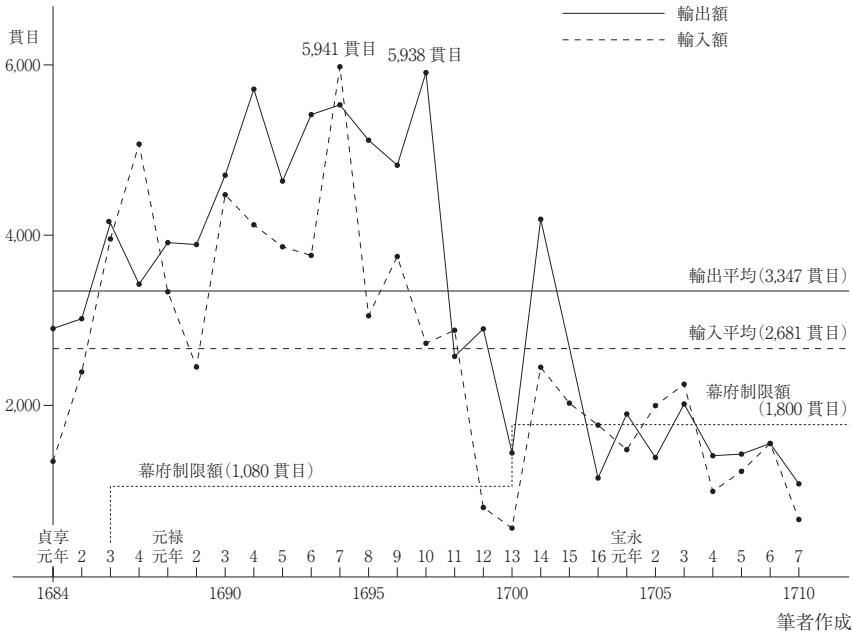


図5-2 私貿易取引商品の割合

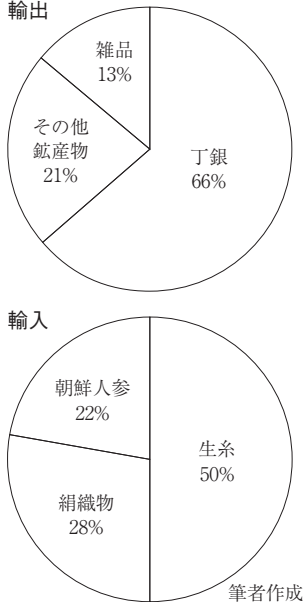
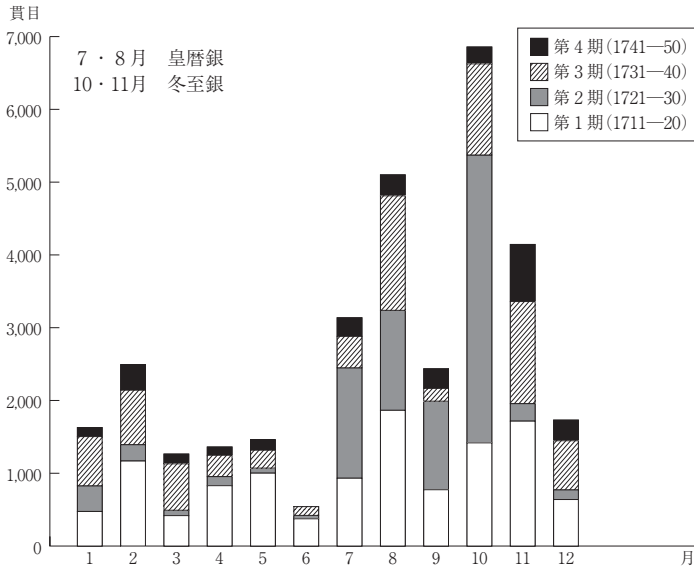


図5-2の円グラフをご覧ください。これは、私貿易の取引商品の内訳を示したものです。輸出のほとんどが丁銀（六六％）で、これは日本の国内で使われていた通用銀貨がそのまま商品として倭館で商われていたことを示しています。銀以外は、銅や鐵などの鉱産資源で、その他とは刻みタバコやキセルなどです。日本から朝鮮へ喫煙習慣が伝わりましたが、それに関連していたのが倭館の私貿易でした。しかし全体の割合から見ると僅かで、輸出の大半は銀だったことが分かります。輸入のほうですが、こちらは特徴がはっきりしています。生糸（五〇％）、絹織物（二八％）が、輸入全体の八割近くを占めています。これは中国産品です。対馬藩が主張する朝鮮人参の輸入割合は二二％で、三分の一以下です。銀が劣悪になったため悪影響を受けるのは、

図6 銀輸送高の季節変動(1711~1750)



出典：宗家記録『館守毎日記』(国立国会図書館所蔵)

筆者作成

朝鮮人参よりも中国産品である可能性が高いことになりま
す。

私がまだ大学院生だったころ、国立国会図書館で『館守
日記』を何十冊もまとめて読んだことがあります。はじめ
は倭館に銀が入ったときの数字だけをノートにとっていた
のですが、そのうちに読んでいてあることに気がつきまし
た。倭館へ送られる銀は、「お銀船」という小さな船で運
ばれますが、その入港が月によってかなり差がみられるの
です。たとえば一月から六月まで、お銀船の到着記録は僅
かで、仮にあつても積んである量が少ないのです。ところ
が七月になると、急に銀の届く回数が増えます。これが八
月まで続きます。ところが九月になるとまた少なくなり、
一〇月、十一月になるとまた多くなります。そこで銀の数
量だけではなく、むしろ月別にみてみようと考えまして、
それを図にしてみました。この図6は一七一一年から一七
五〇年までの記録により、お銀船の到着と銀の輸送高を月
別に積み上げていったものです。大きな山が二つあり、七
月・八月の山と一〇月・十一月の山で、後のほうがより多
いということ、これはつまり銀の輸送高に季節変動がみら
れるということになります。

表2 朝鮮の外国派遣使節

名 前	通信使	燕行使
回 数	12回(1607～1811)	478回(1637～1881)
目 的	回答兼刷還 通信	謝恩 冬至年貢 進賀 など
派遣される 正使の位	正三品相当	正二品相当

吉田光男氏(放送大学教授)作成

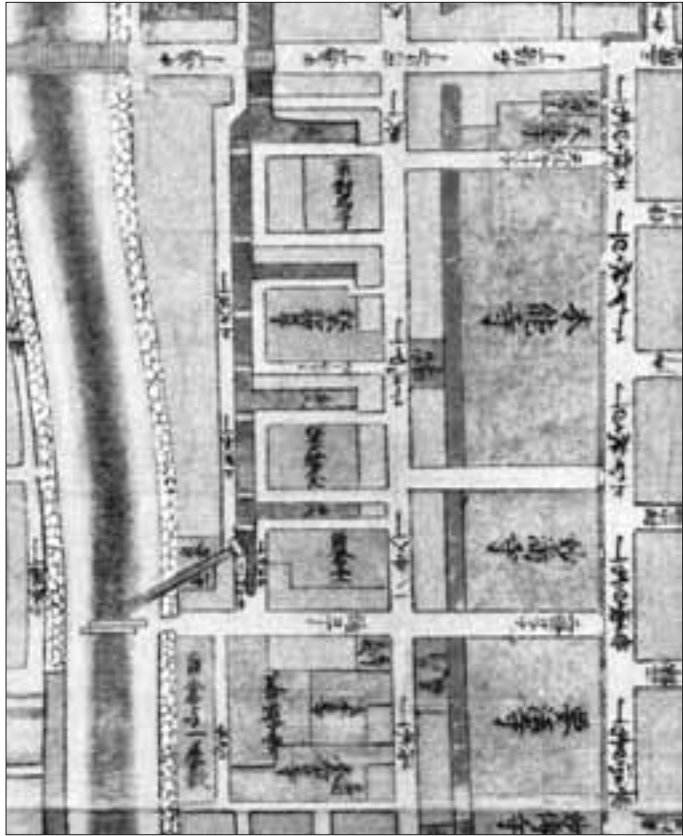
さらに『館守日記』をみていきますと、七月・八月に倭館に到着する銀のことを「皇曆銀」と書いてあります。また一〇月・十一月は、「冬至銀」とあります。これは一体何なのかと、俄然おもしろくなってきました。名前から推測するに、朝鮮と中国との国際関係がからんでいるようです。そこで朝鮮史の専門書を読んでみましたら、そこに答えがありました。朝鮮は、日本と中国に使節団を派遣して

います(表2)。日本へは通信使で、徳川時代に一二回です。いっぽう中国へ派遣する使節は燕行^{えんこう}使^しといって、四七八回もソウルと北京の間を往復しています。ただしこの頻繁な使節団も、明から清の時代になるとしだいに整理されていって、細々とした使節をまとめて派遣するという形に変わっていきます。やがて

定期的な使節が、「曆咨行^{れきしやう}」と「冬至使」の二つにまとめられました。曆咨行というのは、中国製の曆を受け取るための使節です。朝鮮国は中国の冊封を受けているために、外交文書に中国の元号を使わなければならない、そのため中国製の曆が必要なのです。この曆咨行は、ソウルを八月に出て、年内に戻ります。また冬至使というのは、冬至の祝賀儀礼にあわせて出る使節ですが、年を越して正月の祝賀からその他諸々の祝いを兼ねて派遣されるため、十一月にソウルを出て、翌年の四月ごろまでに帰国します。つまりお銀船の季節変動は、この使節団の派遣月に連動していたことになります。

では、この銀は一体どこから持って来たのか。宗家の記録によりますと、輸出用の銀は人參代往古銀も含めて総て京都で集めています。そして、皇曆銀は六月までに、冬至銀は八月までに、対馬へ到着するようにと指令していました。対馬藩の京都藩邸を、古地図で確認しておきましょう。この地図(図7)は、元禄一四(二七〇一)年に作成された京都の大総図で、現在、慶應義塾大学文学部古文書室に保管されております。鴨川から水を引いた高瀬川の一之舟入りが、ここを開鑿した角倉屋敷で、現在、日本銀行の京都

図7 京都藩邸と高瀬川一之船入



貞享4年(1687)、対馬藩は交易品の船便を考慮し、加賀藩邸の南隣を角倉氏から購入した。側を流れる高瀬川は京都の豪商角倉了以の開削による運河で、鴨川からの水取入口、一之船入を起点に、南の伏見まで延びる。図の上方が南。

出典：『京師大絵図』元禄十四年版(慶應義塾大学文学部古文書室所蔵)

支店が置かれています。この高瀬川に面している屋敷には、「舟入」があつて、屋敷の前に船が繫留できるようになっています。ここに、「宗対馬守」の屋敷があります。これが伏見から淀川へ、そして瀬戸内海―玄界灘―対馬―倭館

けていました。これは宗家の貸借帳簿に出てきますが、この状態はかれらが日朝貿易へ資金提供をしていたことを意味しています。糸屋町だけでなく、京都の三井家(越後屋)の記録からも、日朝貿易に多額の資金を提供していたこと

―ソウル―北京へと続く「銀の路」の起点になります。

この帰り路は、「絹の路」でした。中国産の生糸・絹織物が、朝鮮使節によってソウルへ運ばれ、「銀の路」を逆行して、最終的に京都へ届けられます。このうち生糸は、西陣ですばらしい織物に仕上げられ、また絹織物は室町の巻物問屋の手に渡ります。京都に糸屋町という町名があります。このお店な衆は、こぞつて対馬宗家に多額の金を貸し付

が分かります。長崎では幕府の政策によって銀の輸出が抑制されており、そのため生糸・絹織物の輸入量が減っていた時期がありました。そこで京都の織屋地帯では、脇ルーツから入ってくる朝鮮經由の唐物に注目したようです。まだ国産生糸が十分に生産されなかった時代、対馬藩の朝鮮貿易はそれを埋めるような役割を果たしていたことになり、日本の経済や産業と深いかかわりがあったことが分かります。

大体このあたりで私の話は終わりますが、最後にこれからの研究の方向について申し上げておきます。一つは、最近になって分かってきたことですが、日朝貿易に民間資本が大量に投入されていたことです。個人の資格で倭館への渡航を許された商人たちが、自分のポケットマネーで日朝貿易に参加しているのです。もちろん藩が投入する資本には及びませんが、個人貿易の全体を集めると結構な数量になります。現在、個人資本で貿易を営む商人たちの活動実態を追いかけています。

そしてもう一つは、ここ大阪の町と関係があります。近世後期の日朝貿易は、あまり中国物資が入ってこなくなるため、規模はかなり低下します。しかしながら対馬藩は日

朝貿易を中断することなく、しつかりと、かつしたたかな経営を展開します。何が主流かというと、朝鮮国内で生産された薬です。意外と日本人には知られていないことです。が、朝鮮はものすごい医学先進国です。先ごろNHKで放映されたチャンダムという女医さんをテーマにした番組がありましたので、御存じのかたも多いと思いますが、日本の室町時代のころから朝鮮王朝では薬に対する関心が高く、各地に自生している薬材を集積する薬市場が昔からありました。しかもその基となる医学は、本場、中国に負けない独自の発展をとげて、多くの医学書を朝鮮で集大成しております。この優れた医学書が、文禄・慶長の頃の頃から対馬經由で日本に輸入されます。同時に病への処方として、薬についての知識も輸入され、それが江戸時代の朝鮮人参の多用化につながったと考えられます。こうした朝鮮流の「韓方医薬」は、やがて薬の集積地である大坂の道修町で商われるようになります。

そしてこの薬の対価として対馬から輸出されたのが、銅です。この銅は、日本全国の銅山から大坂（銅座）に集められ、住友（泉屋）が中心となって輸出用に精錬しておりました。朝鮮に渡った日本の銅は、朝鮮の銭に鑄造されま

す。そのようなことで、また苦手な貨幣史に戻るような予感がしていますが、これからの日朝貿易の研究の拠点は、ここ大阪に移ってくるような感じがしています。銅座のことで、また道修町のことなど、これからぜひいろいろな情報を大阪の皆様にご教示いただきたいと思いますので、どうぞよろしくお願いします。本日は、どうもありがとうございました。

〔付記〕 本稿は二〇〇九年五月三〇日、大阪経済大学で行われた第七回春季歴史講演会の講演内容の一部削除あるいは修正したものである。

（たしろ かずい・慶應義塾大学大学院文学研究科教授）